

河合氏藏書

翌廿日加藤駿河守昌頼京美濃守虎胤五十小昌織部正  
虎盛を呼く晴幸と共に長尾景虎乃軍術を商量す一と  
お里晴幸中け教ふ景虎乃父長尾六郎為景越中國千擅  
野ふ討死せし時景虎十二歳お里姿を山臥し似し奥  
羽羽列を巡行し之終より關東諸家乃城下を廻り十四  
歳乃時越後へ歸り姊婿長尾越前守政景と軍せし不政  
景の兵を八千景虎乃勢を二千お里然共景虎遂ふ切膝  
く政景由降参せし傳聞鎮西八郎為朝を十二歳お里  
父為義乃不興を受豊後國了下向し大小廿餘度乃軍出  
く十五歳乃時を九列を打從龜しとかや更り中勇らぬ  
勇將おる身乃健おる不差掛り太子軍を廻りぬ氣

國華

實と見え、屈伸乃道理を、断心付ぬ處有る、去て此後  
何時に旗本と打合、力戦去く有無乃勝負を決せんと  
為る、各處に、地方あり、陣法を堅固に、板に鳥雲乃変化  
屈伸乃自由を以、始終に勝負を、肝要を、終と、理明の、  
詞約り、演去る、何に、此義了、同し、けり  
松平夜話了、謙信何因豊前守に、語し、けり、武田信玄  
も、六分乃勝を、常々、全き、勝と、七分八分、終、不、世  
ら、せぬ、由、閑及、以、今、夜、松任乃、要害を、一日、不、乘、取、殊、不  
城、至、剛、強、と、同、松平、長、筑、前、守、兄弟を、討、取、其、上、信、長、勢  
五、萬、乃、陣、所、大、聖、へ、前、廉、案内を、云、以、方、より、仕、掛、追、崩  
大、分、は、十一、分、了、過、夫、分、大、勝、み、以、先、々、今、度、を、歸、陣

最も、以、信、玄、あら、は、何、と、松、任、乃、城、落、去、大、聖、寺  
乃、陣、へ、仕、掛、中、に、各、處、を、や、以、分、り、吾、等、信、玄、了、及、た、ぬ、処  
お、り、云、々、又、持、崎、直、江、了、語、ら、せ、け、分、の、信、玄、を、軍、了、鍛  
鍊、深、き、老、將、み、に、在、間、對、陣、乃、勢、み、に、常、乃、如、く、術、を、為  
物、あら、は、何、と、云、く、中、備、乃、違、と、各、處、を、以、備、遠、き、各  
處、へ、此、方、より、無、理、に、仕、掛、く、必、負、る、り、相、た、能、侍、を  
多く、亡、ま、か、り、二、川、お、り、唯、少、人、數、み、に、輕、く、働、く、逸、間  
も、あ、り、信、玄、と、手、不、手、を、取、紙、臥、し、首、を、取、り、指、違、る、り  
何、也、手、詰、乃、勝負、を、せ、ん、と、覺、悟、と、云、共、信、玄、之、丈、志、  
賢、き、大、將、み、に、是、を、悟、り、成、程、靜、ま、り、荒、勝、負、不、遇、と  
あり、是、信、玄、謙、信、兩、雄、乃、分、み、に、晴、幸、り、見、一、處、一、毫

小錯たを人を識乃鑿明るが里と云危るが里  
廿三日景虎陣拂去々越後へ引還せば鼠窟乃仁科上回  
乃海野浦野を始々麻績會田青柳等悉く人質を入々降  
冬を晴信朝臣去也を小室内山西城へ送廿八日小甲府へ  
凱陣あり同十七年六月晴信朝臣諏訪へ進發せら也高  
遠乃城を攻んと擽せら也々々知へ景虎小縣へ出張乃生  
法進あり一かハ直高遠を指々和回峠を打越長窪を  
東北了打々内山城了入ヶ處を以々本陣とせ景虎乃進  
々戸石不陣を發六月四日よ里千曲川を涉々々是輕迫  
合を挑むと云共晴幸ハたく諫め陣法を堅固ふ鎮め  
隊伍を亂々以景虎遠慮を廻ら々十六日乃辰乃部々至

里諸手を乘廻し速ふ人数を収め陣を拂小是乃甲列勢  
乃咬留んと追驅来らハ地理善知小引渡々有無乃一戰  
先と策里ハ分那里晴幸景虎乃術を早く推知せハハ然  
由動の以見ぬ中ふ々居々里けり  
魏乃征東將軍滿寵吳乃軍兵合肥を攻んとせ分使を  
聞魏へ表を上里兵を益んとせ然る々吳兵を收充  
々引退く寵おり危らく賊大々擧々寄来里々々忽々  
退還る是其本意ハ非也此必偽退々我兵を罷せ倒還  
虚々乗し不備を掩せんとせ々分あらんと云て兵を益出と  
せ止せ後十餘日果々々吳兵来攻也共寵々軍備ある  
か故々勝出と能を以と云里晴幸兵法了通曉せらる一と

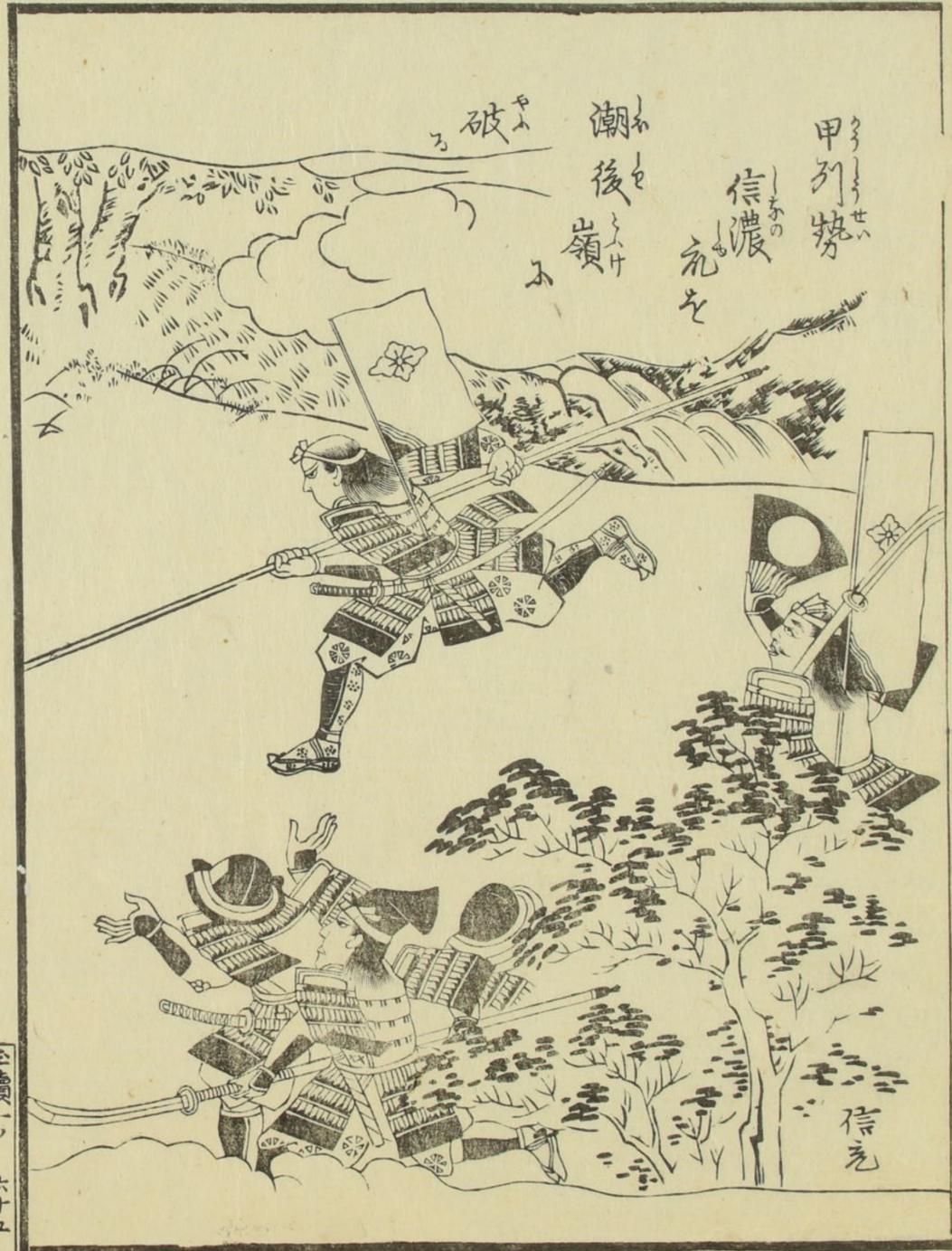
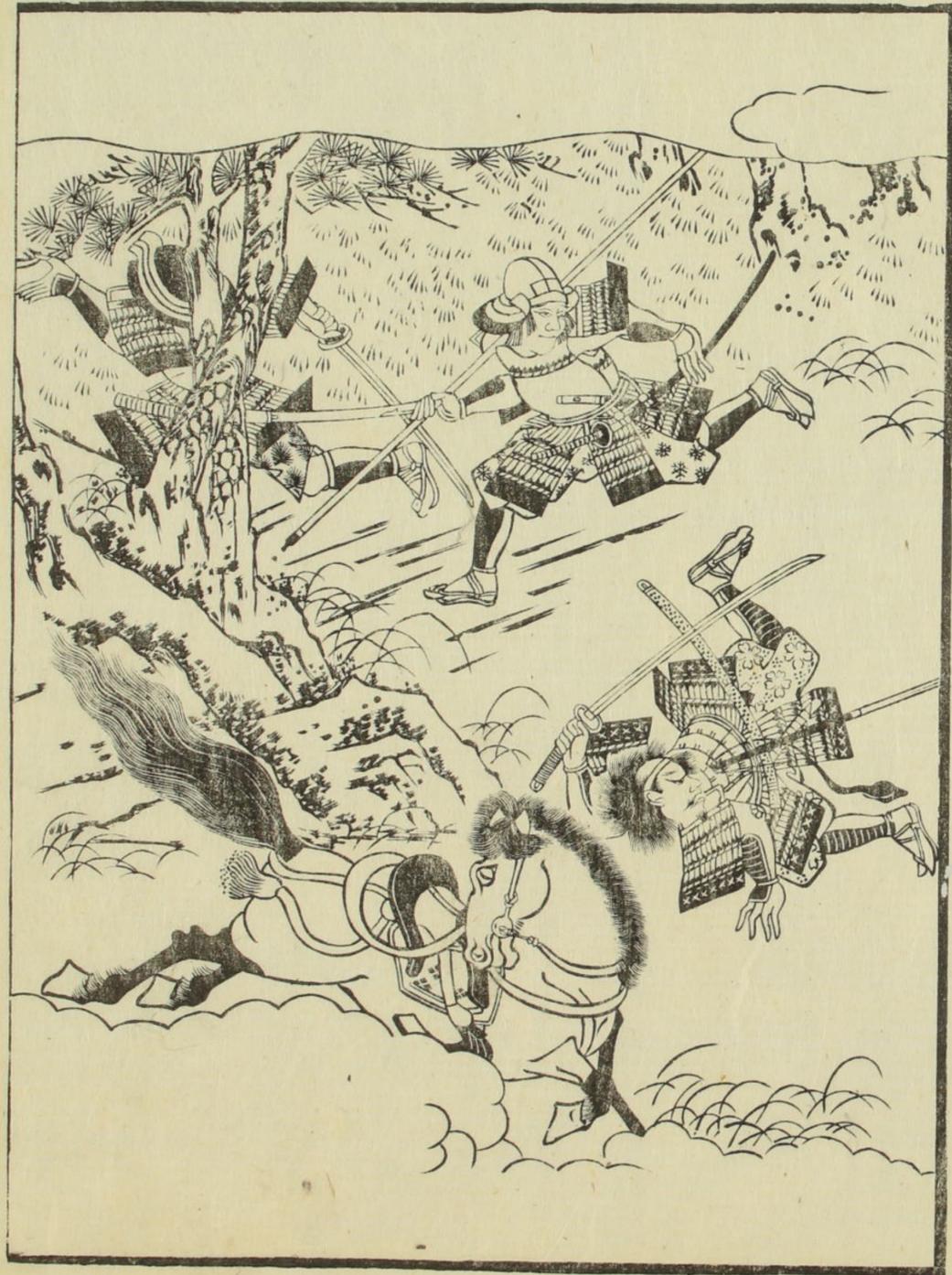
鬼神乃如。満寵不信。一と萬々と云へ。

景虎越後より引還し。諸侍將を集め評定。去けふを弱を示  
去要害了誘き撃んと謀里のふと既み兩度々及庵と由  
甲列勢備至嚴重ふし。術み乘とふし。今度々木曾小笠  
原と喋し合を。潮尾邊ふし。軍を持を戦脱ふ。酣からん時  
我川中島へ打し出せ。兩科を切取んと。囊乃中の物を探  
かぬからんと。群議決着し。木曾小笠原へ使節を差た  
七月上旬諏訪へ勸くべしと。約束を固めたり。然るる晴  
幸戸石を景虎乃引退く時。よ里我腹心乃者を兩三人商  
人乃作里立く。越後國を遣し置り。是等乃方便落り  
かく聞定め晴幸了告知せたり。晴幸あを晴信朝臣了

告ふらの内々用意をを為せけふ。斯ふ處ふ七月十六日。諏  
訪乃陣代板垣孫次郎信里伊太本曾小笠原之子乃軍兵  
一万餘人。潮尾拵掬原へ打し出ぬ。是々一定當城へ寄ん  
と乃儀みくひへしと。我は進志くけふ。甲列みくひの思設し  
と。赤色ハ六千餘騎を引率し。十八日乃卯刻。潮尾嶺に馳  
着大里。甲府より潮尾嶺に至る。大里に遠木曾小笠原  
も。越後乃便宜を待く。未出陣せば。潮尾拵掬原より寄合  
乃諸軍勢乃。赤里々々。右往左往。周章を甲列勢長途  
の疲を肩と由せば。潮乃備が如く。推寄思々。分捕を信  
濃勢散々。打負討死。八百七十二人。赤里越後みくひ  
相々味方乃軍議乃漏たふ。からん。然ハ發向と。由功あるへ

から以て川中島へ出以て里小を晴幸景虎の軍機を  
同十八年四月十二日深志小笠原長時乃伊奈本曾三方  
乃軍兵動せしに諏訪乃壘を侵し殊り去年景虎と牒合  
潮尾持穂原へ打出大里一意趣を聞へしとて甲府を打立  
十三日諏訪へ到着ありて爰ありて三方乃小笠原晴幸  
右淺利式部少輔馬場民部少輔及び足輕大將安間之右  
衛門尉と共に伊奈を向ひ軍を晴幸次第と定めらむける  
處へ景虎八千餘騎ふり小縣へ打出飯富虎昌が内小乃  
城を攻め別關之けむ廿六日諏訪より小諸へ進發せ  
ら敷 諏訪より小諸 景虎が飯富虎昌が八百餘騎了切崩  
させ矢澤乃奥へ引退せける晴信朝長小諸へ着陣あり

川中島を聞海野平了陣を取五月六日使者を立り景虎  
信州へ打出るに西料乃地を領せんと貪んある小以て以  
元來武田乃家小意趣嘗て是か一但村上義清小頼もせり  
取弓箭小甲斐信濃越後之國乃民を苦め互り鎧を割  
鋒を單以て永く悲讐を構鄰國乃好を破りて何乃詮らへ  
る願ひく義清を葛尾へ返させ本領を安堵仕り候了御同  
心以て之國乃民乃喜ふ小若御同心も是無ハ景虎止しと  
を得以て御陣小馳入討死仕へしとすけむに晴信朝  
臣晴幸と評後有る答ふ小義清小頼も是度々當國へ  
御出張乃条誠小神妙に覺え小但葛尾を村上了還志中  
へきと乃御説を更了其意を得中さ以て譬ハ越後國ハ元來



上校民部大輔憲顯尊氏將軍より守護職を賜ふまじく  
候へり代々其子孫に傳へり山内乃家了所務まじく以て能登  
も何れも山内乃家衰去後乃御分乃領とおもひ能登  
越中乃國々々元ハ長尾乃領國からぬを其奉互へ還させ  
給へりこれとの様かき里義清乃知約しつゝ以て不葛尾を  
元ハ原底了附大不處みく曩祖武田伊豆前目信光入道光  
蓮の時より以來總領了傳を里たる所領おもひ別々晴信子  
代乃先祖陸奥守信武尊氏將軍と共に武家中興乃運を開  
かきし時甲斐信濃乃源氏乃大將軍を賜ふ以て兩國了  
法武士乃進退を掌る武田乃家了付た不恒規おもひ義清  
を跋扈自立的に色を顯る久く當家乃式司を受て以る

勅發をかえんと致さく以て八月箭を取て對折せしよ里  
侍共を差向く以て遂に林以城を指て其國を以て落し  
おもひ去運怯く道理不暗き義清を何とく葛尾へ歸し以  
以て討死を好むとあらは御入以て軍兵と力を出  
く御介錯了充以て以て方より軍の始中よりさかると返辭  
あく使者を還させしよ十日乃早朝お景虎まき使者を  
立ち景虎越中能登乃間へ出陣仕へしとの以て只今此表  
陣拂以決ふ御幕あふるく何所ふくも還し合ひらん  
と申す其日乃午刻不引退く是景虎と對陣晴信朝臣を  
八月朔日甲府へ凱陣あり十八日己刻まじく上野へ發向  
せら武藏上野乃塙神流川まじく押詰近郷を放火し以



不敵出會ね晴幸並回確氷峠乃切河を踏不知案内の  
 敵地より輕く發備を離せ働急々守と諸手を諫め軍兵  
 を纏ふ引還さんとせし知る安中越前守和國倉賀野以  
 下六千餘人蕪川乃代方和國城乃右手之寺尾入陣を取  
 九月二日内後昌豐馬場景政原昌俊同昌勝淺利信音小  
 宮山昌友と合戦を挑むと云共晴幸よく陣法を調練志以れ  
 隊伍亂れ進退常あり上野元遂了打買五百廿七人討死  
 去ハ此序了倉賀野上野輩馬郡倉賀野者乃西ノ古城  
 倉賀野冬河守乃錯あり倉賀野氏之祖と以和國同ノ  
 秋行高乃子倉賀野之郎高俊を祖と以和國同ノ  
 郡高崎乃下村あり和安中同ノ確氷郡原市村  
 田右衛門大信輝乃城あり同ノ下城乃舊跡あり  
 里大永五年安中元迎忠成同ノ長野元越後國  
 松井田小屋城を移し築く同ノ松井田新發回住人出羽守忠

玉續一ノ六十七

親しめ此城を等乃城々を攻落さる處をいと評  
 築き小屋城と号し  
 定區々家外へ小笠原長時下諏訪へ出張を致し聞え  
 乃色は安中を指し諏訪へ發向あり去共長時出陣せり  
 里去より十一月三日甲府へ凱陣せらる同十九年四月景虎  
 殖科郡地藏峠を打越佐久郡へ發向を致し由斥候乃兵追  
 おひし晴信朝長乃木曾小笠原を攻んとし陣を取坐  
 拮据原へ注進せし晴幸より深志小笠原長時ノ城乃路を  
 押え置青柳麻績を馳越猿馬場乃あかた素原より里川中  
 島より亦出越後勢乃後へ廻り攻めらる景虎何了猛  
 志と云共推付を見せしあるへり以と評定あり同十一日  
 飯富兵部少輔虎昌右乃先手小山田備中守乃先

手真田彈正少弼幸隆之信列先方乃諸侍を合せ中備  
とあり。尤馬助信繁元山伊豆守信良之旗本乃先備馬場  
民部少輔内儀修理亮浅利式部丞日向大和守友右乃服  
備諸角豊後守甘利為三小曾勝治之尤乃服備栗原左衛  
門佑小山田左兵衛尉之後備原加賀守友締乃備と定め  
段々陣を敷景虎之佐久郡を指善光寺へ押渡是屏  
川を後ふ當一萬人を二手ふ合二乃身を以て景虎乃旗  
本とあり。西陣をくふ是輕を繰出鐵炮迫合を始たりけ  
る時天暴久撥曇里白日光を失ふよと見えハ真圓なる  
黒雲甲列勢乃よよ里起里山下風ふ翻翻一景虎乃陣の上  
了廉之掩以暫く有る日方へ散亂を景虎何とぞ思けん

諸手を乘廻し例乃青竹乃柄乃乘腰を守振利那ハ  
少を利那と云とあり又一日夜を三十分刻一を擧呼  
律多と云擧呼律多を六十分刻一を地羅と云地羅を  
千六百了分一を利那と云去ハ一日了二百八十八万  
利那あり一時小廿四萬利那一刻二万八千八百利那  
あり人乃息一晝夜了之萬六千五百息之釋氏六帖不  
也然之ハ一息ハ七十八利那有奇ハ當之里と利一  
士卒を引揚備を固め之扣之たり景虎甲列勢と對陣既  
不口度了及人と云とハ甲列勢乃兵勢凜々大分と故了  
遂了楚忽乃軍か今日始く雲氣乃天變不依く景虎乃  
鏡乃押付を見たりと軍中一同了詔里傳去於里  
晴幸曆傳去在康よ里南巒傳去乃峰火法を傳く初く爰  
不雁ハ法也景虎ハ驚いた天變と思速く急兵を收  
たるか其書長け十二日郊刻景虎一通乃立文を以て  
中々也けり乃景虎越中能登乃塙同了沙法を辱るこの

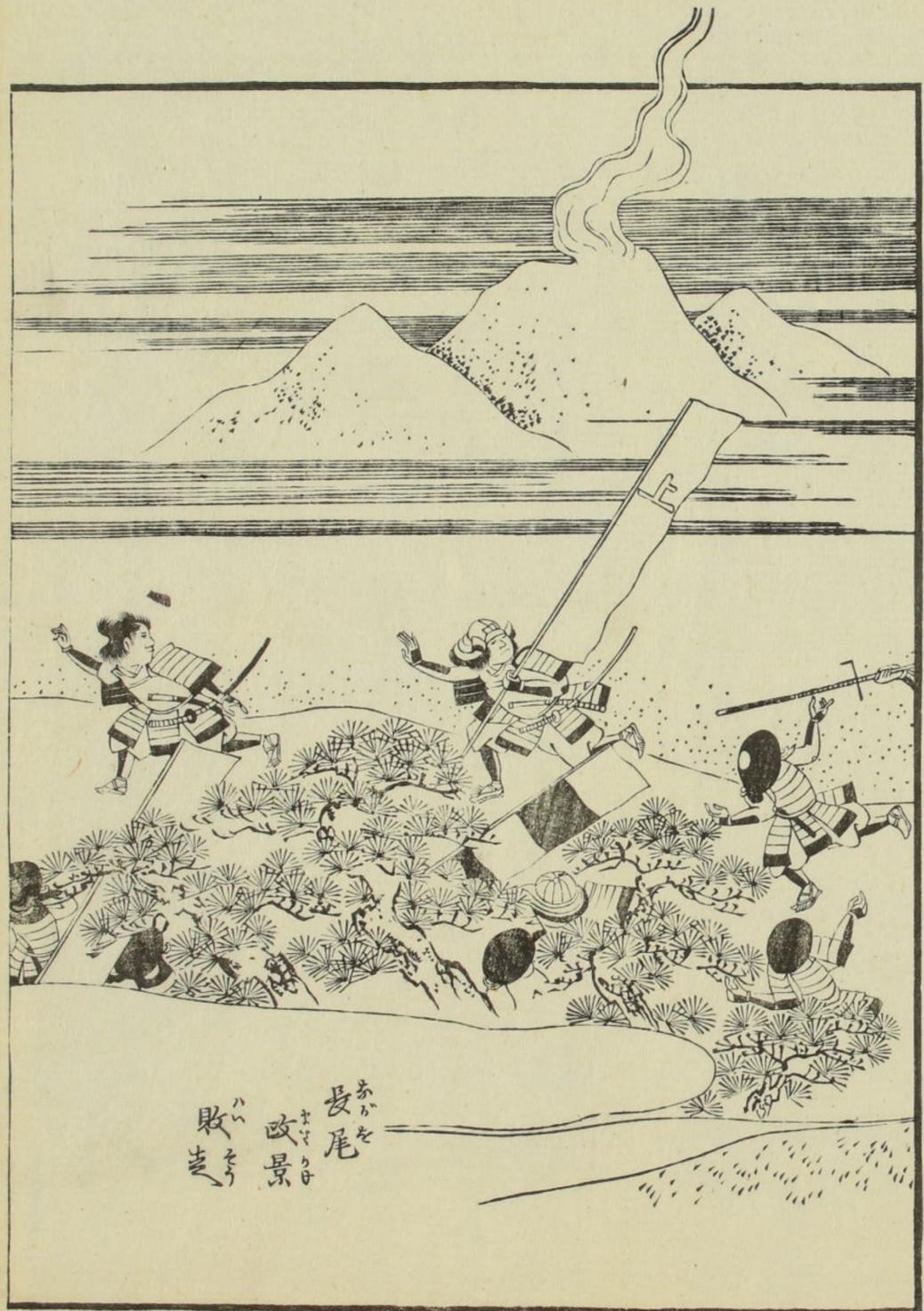
以へは是表より直に發向まへりしに晴信朝臣より軍勢  
を休息させらば以へしと云晴信朝臣より義清荷擔の  
思止し給へたありし甲越弓箭不及りと答らば然し  
晴幸景虎乃越中表乃軍乃援を間諜せしため大益と云  
曹洞宗乃僧 甲斐國の梨那龍石の永昌院乃住持大益と  
云永禄二年信外岩村田ふく 河頭大益一  
里か小畠強之左衛門尉を指すへ越中國へ遣はる軍乃様  
を見せけるふ如何ふし合戦を大事ふふし伏兵を設け  
奸を置軍兵を手足乃如く廻し弓箭を爪牙と等しく取  
扱入し信外表し出陣せし時との雲泥乃相違ふと歸  
來し語りしは晴幸と也ハと云景虎主と若手乃各將  
かか甲別勢を剛敵と見玉へは並々乃術ありし勝を取難

去惟我身乃健うかふを憑る虚を示し堅陣を亂し思切  
たふ奮戦をと仕懸らば其時味方悔く悪ひ也と云  
弓箭を取る来代と乃瑕瑾あらん幾度も陣法を云くし  
る等閑からば武畧を施されんと云肝要と申せ  
去りし馬場内藤を始と云供と云景虎乃手遣り容易か  
らしと思はせたりし 永禄四年九月十日 同十年二月十二日  
合戦乃張本あり 申刻晴信朝臣行年廿一歳ふしと落髪あり徳榮軒様  
信玄と云同時し晴幸も薙髪去り道鬼と号し是より矢  
乃道乃鬼神不通せしと云意あり信玄自筆を添らば  
かゞ道鬼此年又十九歳かゞ道鬼常し景虎の消息を謀  
ふ意を盡せし去り餘多乃白波を過ふ乃金錢を與へく

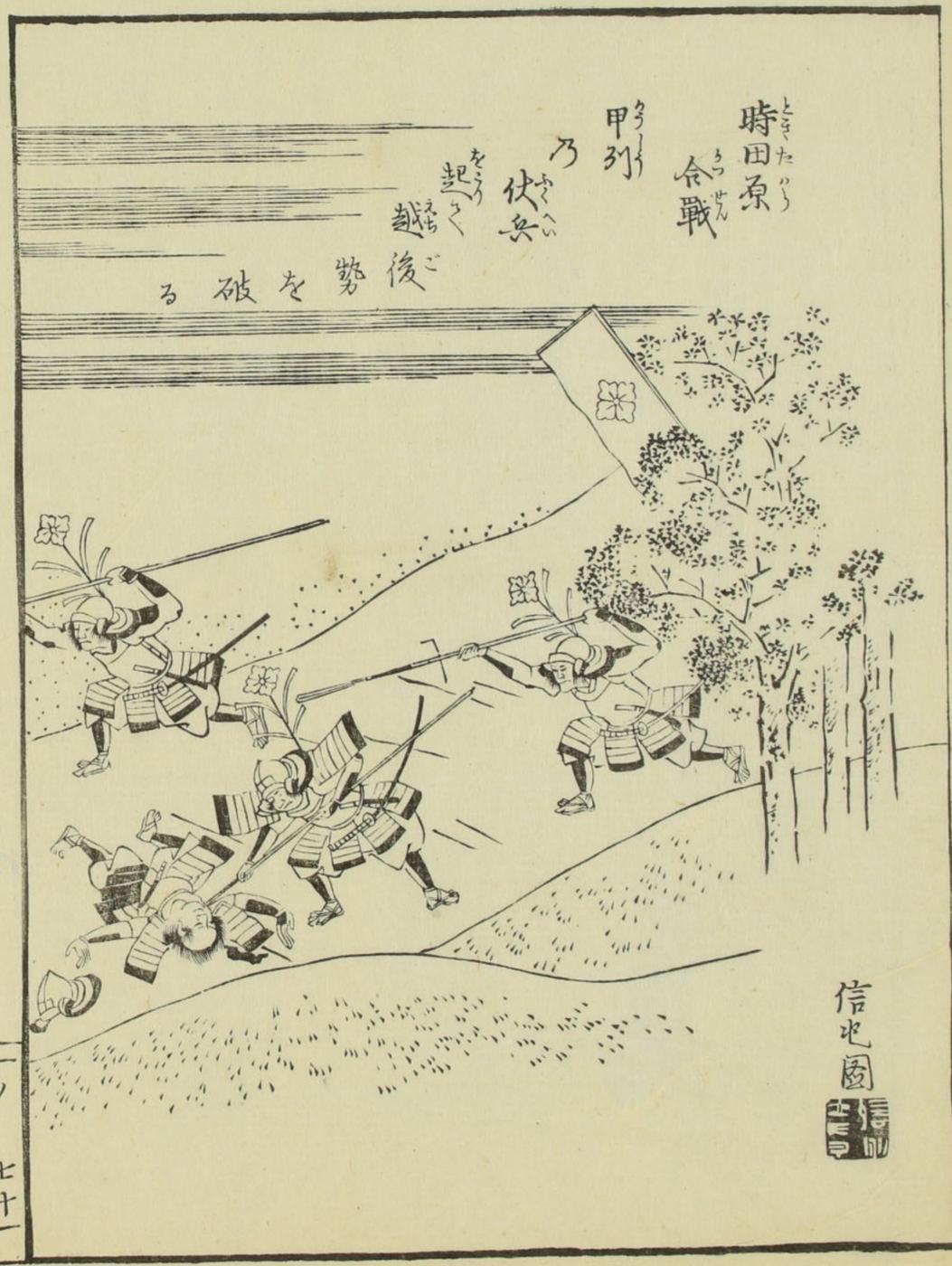
越後信濃不遣一置去り八月下旬上杉兵部大輔憲政菅野大膳以下十口人上下百人許を従く上野國緑野郡平井城を棄て山岡外記ら佐原乃館不入長尾主計頭景吉を使ふく一向景虎を憑せけし景虎齋藤弾正甘糟逆江守子二子餘騎を指副く憲政乃逆ふ佐原へ出く三宿春日山へ移り入憲政景虎を猶子と名し政虎と改しを落しおく往進去り里けり道鬼出せを聞景虎義清不頼也甲幻勢と信濃國乃二郡を争ひ今も憲政乃憑せく冬上野平井を北条氏康と争ふおふ屋一政虎智謀勇略絶倫たり共人性限里あり大敵を回方り受合戦度たり及人國人吏役不疲也士卒行軍不勞也恐く之齒を享る

久しからし去とも我老たり此人乃終を見ら不到しと云けふとかや

周易命期經より依り長尾景虎乃本卦履と甲陽軍鑑のあふを考へるふ享祿三年庚寅冬天元甲寅より二百七十六萬一千九百五十七年不當る卅二を以り除き餘算五乾坤一屯蒙二需訟三師比四小畜履五否巽四月乃誕生おはば履乃九はふし陽失位と一變微と履乃軌數七百五十二を實とし陽失位の數七を乘し五千二百六十は巽變微乃數五十六を以りふまはれ九十九は巽陰得位乃數六を乘し陽得位乃數九を以り除けは六十二とあふ陽失位乃七を再減しは



長尾 政景 敗走



時田原 合戦  
甲列 乃 伏兵 起 越 後 勢 を 破 る

信也 圖

十八六とあふ約一と四十九と以即命期あり景虎入  
道謙信天正六年三月十三日卒を實ふ四十九歳也  
李淳風の傳人秘訣あり晴幸も又法に依るる

同廿一年三月二日政虎春日より打て出八日乃未明  
了時田乃民屋へ火を懸大里然る信玄今夜子刻の時  
田へ馳着ふ是を晴幸も入置大里は間諜が六日の曉  
に告知せしむるなり  
太公六韜の遊士八人其を相ひ變  
を候る人情を問闔一敵の意を觀  
間死間生間あり吳子小善間諜を行ひ輕兵往來其衆を  
事機と云ふ是を越後乃先陣長尾政景も之千餘騎を雁  
行ふ列ね地藏峠を打越ゆ共政虎甲列勢乃神速ふ打  
出たふ了驚き是を例乃間諜等々味方乃謀を告たふか

系通し事乃漏たふる敗軍乃北か里然ハ傾坂乃邊へ引  
て陣を取へしと諸手へ下知し引退く但政景りの甲列  
勢と一軍去り引ふへと城入道伊菴を使しと云送里け  
也ハ政景大に怒り軍乃進退を兼輩乃政虎も習せんや  
政虎廿三歳と云儘ふ之千餘騎を一平ふか大返り取  
る返り飯富虎昌小田備中守同左兵衛尉栗原昌清真  
田入道一徳齋蘆田下野守等陣へ面由振を切し掛ふ  
晴幸も亦く政虎乃意を知た也ハ馬場甘利内殿乃之手  
を勧めし一度了と返合を飯富小田田と一平了成る  
操大里け也は政景散々了打破ら也幸しと峠を引越味  
方乃陣了逃入たり是より後政虎政景中惡く成り終了

あしを野尻乃海了殺不聖れ里

吳子武侯問不賤志く勇ある者了輕銳を將く敵乃其  
を觀て一むる母一坐一起其政以く理其地を追く  
伴く及たるとか一其利を見く伴く知さるり如くか次ハ  
智將か里與了戦ふとあり也と云里政虎甲列勢乃一  
坐一起其軍令乃整齊大を觀く與了戦入とあり一然  
も政景一手不令戦を勸るしと疑不融一蓋政景を甲の  
勢乃手を假く殺と志めんと欲る不あると去ハ政虎決一  
く政景を援不不及くと晴幸入道道鬼間謀を以く明  
察せ一か故了急了是を討一と知へ一

同廿二年に月信玄乃嫡子右郎義信甲冑着初乃式を執

行を色んり為了姑武勇智畧乃器量を擇と色く飯富兵  
部少輔虎昌乃鑑を着き道鬼及び原美濃入道清原小畠  
山城入道日意乃旗屋了參集志く指南と色くと定められ  
信玄自酌了立くと地口人と義信と盃を行らくと天晴名譽  
乃大将とあしおせとを親中色けり

東鑑不文治四年七月十日甲辰若君萬壽云七歳。始  
く御甲を着せ志め入南面不於く其儀あり時刻二  
品頼朝出御江間殿時冬進御簾を上と入次不若君出  
御武藏守義信乳母と。平賀比企に即能負乳母と色  
を扶持志なる時不小山右兵衛尉朝政御甲直乘と色  
と持冬一以前乃御裝束を改む朝政御腰を結奉り次

小千葉介常胤御甲を持奉を積了納め子息胤正師常  
去也を昇る前行胤頼杖持し又後小従ふ常胤御甲  
を著せ奉り南へ向く云云云云此間梶原源太左衛  
門尉景季御劔を進里三浦十郎義連御劔を進里下河  
邊庄司行平御弓を持参し佐々木三郎盛綱御征箭を  
獻し八田右衛門尉知家御馬を獻し置黒靴子息朝重去  
也を引三浦介義澄畠山次郎重忠和田三郎義盛等扶  
衆なる小み七郎朝光葛西三郎清重總ふ付小笠原孫  
太郎千葉五郎比企弥太郎等御馬乃左台了候し云云  
南庭乃下を打廻し下入時云云云云右馬元遠元去也  
を抱去里申以下御物具親家去也を解脱する云々と

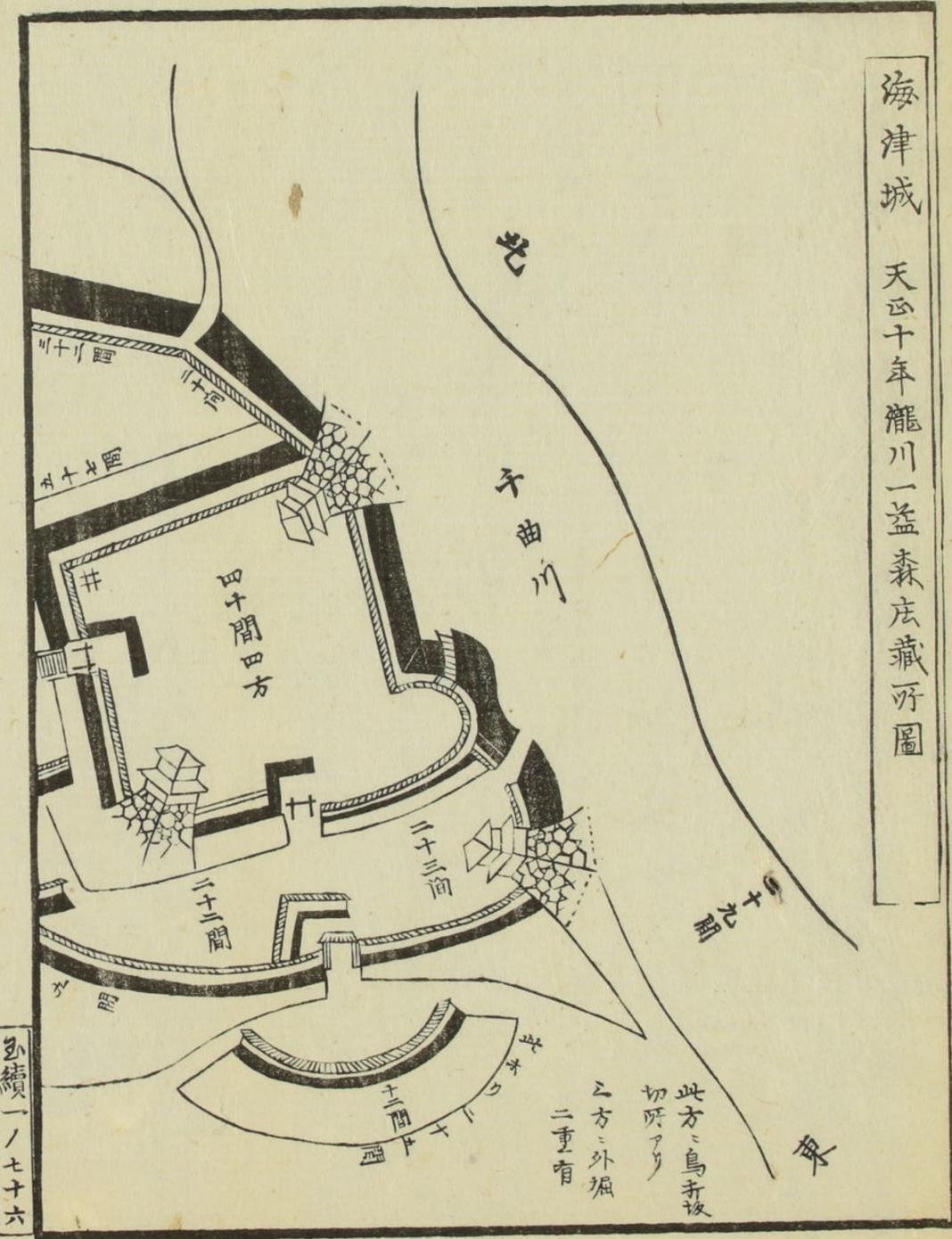
見ゆ是鎧着初乃式を記さ色し初ふへ鎧を着用次  
第小昔々定里大系一無里一ふや義貞記了八幡太郎  
義家乃被着けふ次第とく一番浴衣二番小袖三番大  
ト口番髪亂縁塗五番鉢巻六番了懸七番鎧直垂八番  
脰巾九番括十番臙當十一番類貫十二番服當十三番  
手蓋十四番鎧十五番刀十六番太刀十七番征前十八  
番弓と記さふ此次第から以着用人乃あはは去也角  
云云云云但天文乃頃云云鎧棄去く胴丸桶川胴佛  
胴等とあり鎧直垂大トを着以下着小袴を用ふふ  
也其着用乃次第各別あるへき也

信濃國埴科郡清野館々要害乃地あり一城を築き爰小





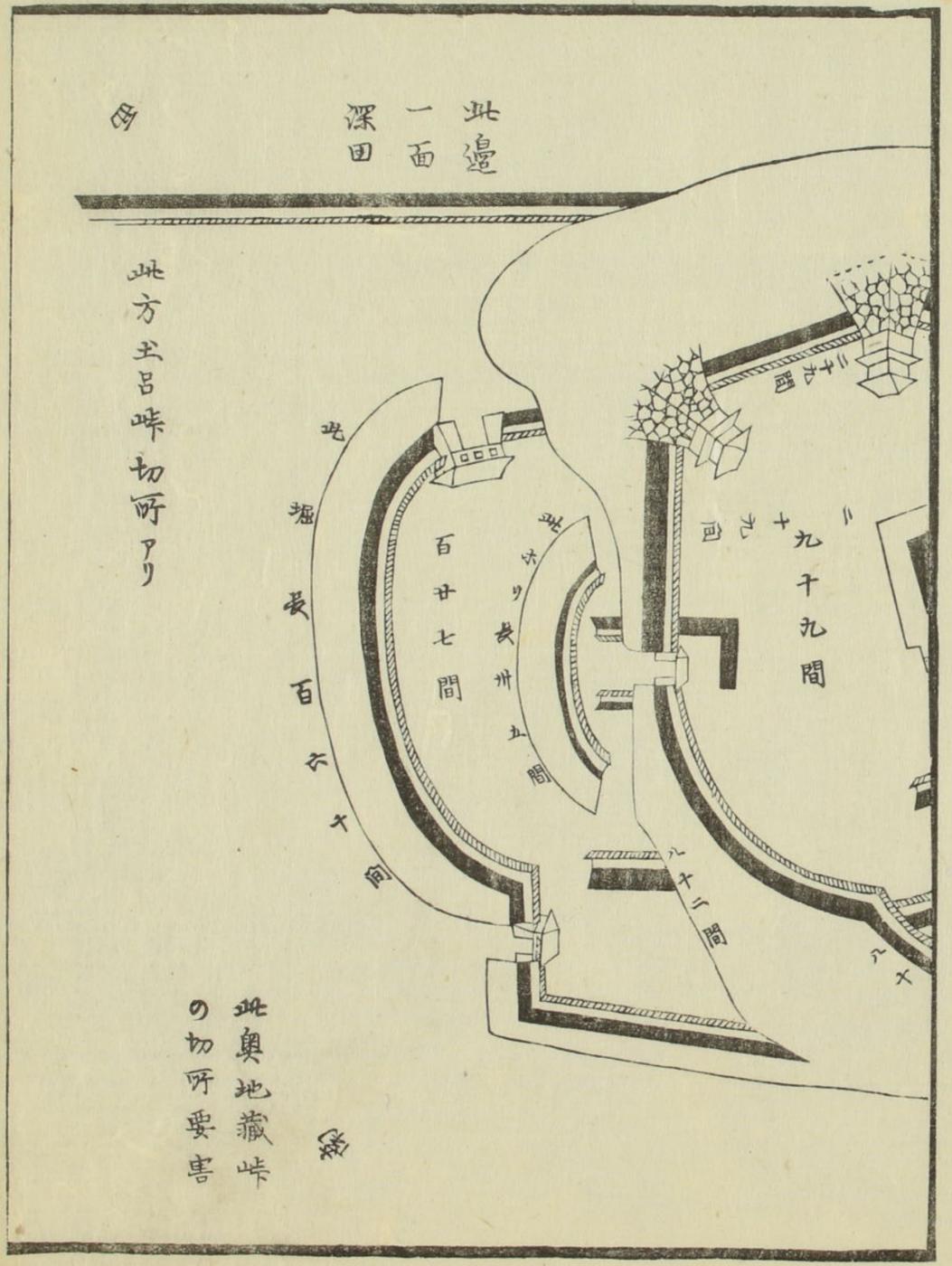
海津城 天正十年龍川一益森庄藏所圖



此方ニ鳥打坂  
切所アリ  
ニ方ニ外堀  
二重有

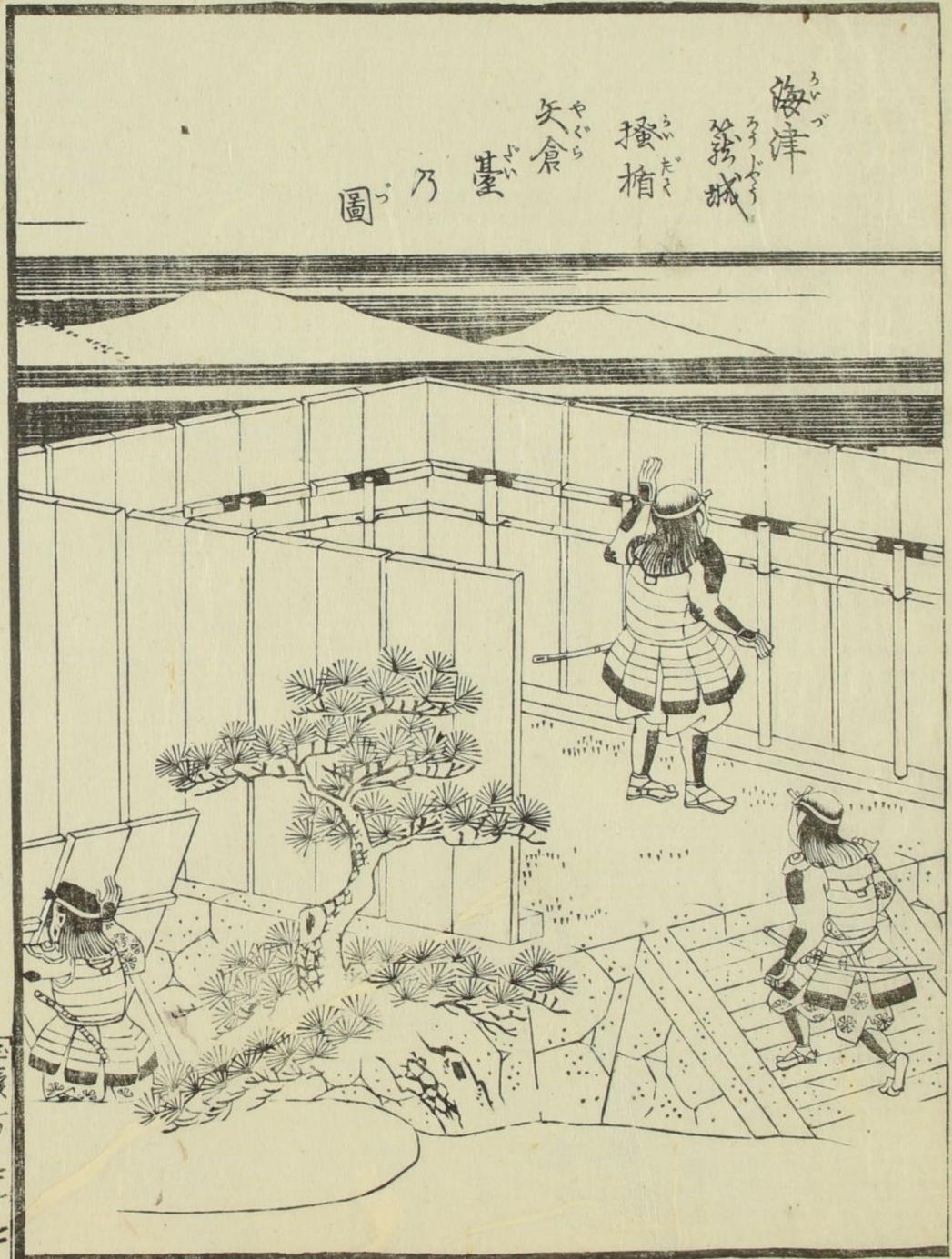
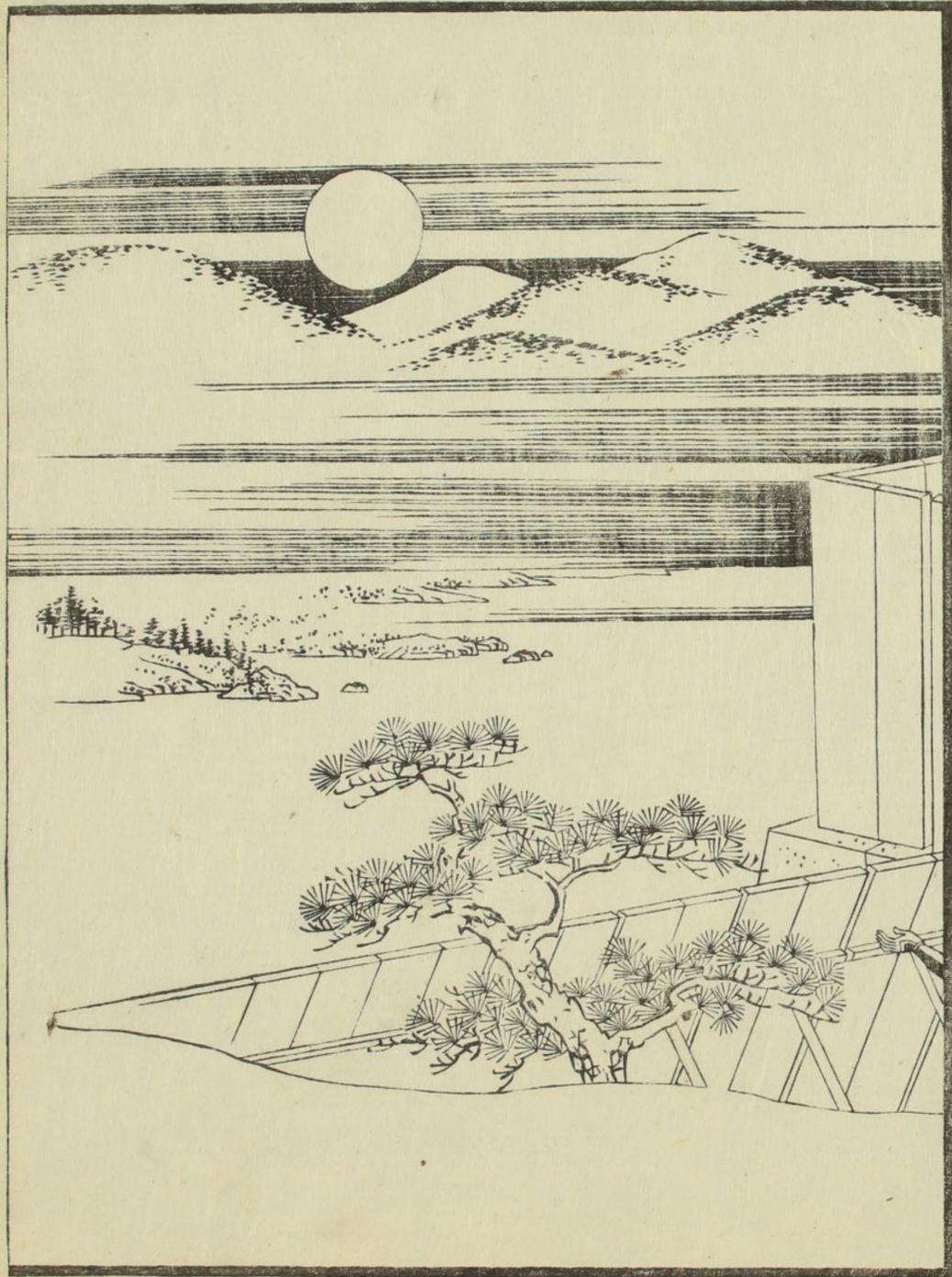
外續一ノ七十六

此邊 一面 深田



此方ニ鳥打坂  
切所アリ

此奥地藏峠  
の切所要害



海津 築城 搔楯 矢倉 臺 乃 圖

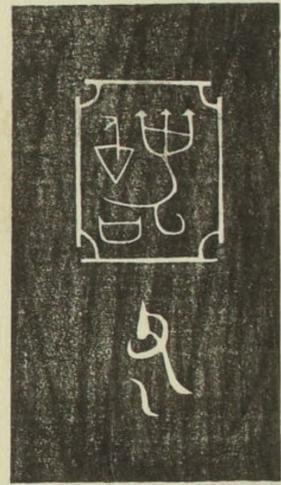
連以上三頭並共八人。是輕廿人。長柄口十本旗二  
木持者六人。口人。煩。是輕旗長柄六十六人。口十騎一  
騎口人。連二百人。都合式百九十口人。本里。五八乃人數  
八口十騎一備。升形五七。都合二百六十口人。七五  
乃人數。備大頭。是輕大將。主從廿八人。是輕廿人  
長柄。五本旗。二本持者六人。三十五騎。百七十五人  
五六。都合二百廿口人。五六。騎乃。見也。但海津城  
圖不就。考人。教了。東方乃。虎口。丸馬出。南西乃。虎口  
乃。二重馬出。本里。信濃國。佐久郡。海津城。誠訪。郡上。原城  
出。甲陽人數。割。小。小。山。回。備。中。守。七十騎。市川。梅。印。騎  
馬。十騎。足。輕。五十人。原。與。元。衛。門。騎。馬。十騎。足。輕。五十人  
と。あ。あ。あ。三人。自身。乃。與。力。足。輕。本。里。北。外。不。騎。士。百。五

人。是。輕。六十人。長柄。百五本旗。六本持者十八人。總持。十  
之。百。口。十。餘。人。を。籠。ら。せ。り。らん  
城。取。卷。本。南。高。去。北。依。々。赤。龍。地。火。性。本。里。と。云。海。津  
城。北。乃。千。曲。川。流。也。南。乃。地。藏。味。乃。切。可。本。里。河。謂。赤。龍  
地。乃。協。へ。里。又。本。城。乃。間。數。大。中。小。上。五。十九。間。中。乃  
口。十。九。間。下。乃。口。十一。二。間。と。あ。里。海。津。城。本。城。口。十。間  
口。方。と。云。ハ。下。乃。口。十一。二。間。乃。法。乃。合。入。北。佐。古。城。圖  
本。依。々。考。人。本。里。信。濃。國。高。梨。城。本。丸。口。十。間。了。三。十。八  
間。半。犬。飼。城。本。丸。三。十。八。間。口。方。下。山。回。城。本。丸。口。十。又  
間。乃。三。十。八。間。中。島。城。本。丸。口。十八。間。了。三。十。間。等。と。同  
法。量。と。知。道。本。里。元。傳。本。祭。仲。云。く。都。城。百。難。了。過。本。ハ

國の害あり 年傳 隠公元 しかや杜預の注了方丈を堵と云  
之堵を雉と云一雉乃牆長三丈高一丈と有ハ百雉ハ  
之百丈あり 周尺一尺今乃曲尺七寸五分九釐餘不當  
あり六尺一間と一尺之間二百七十寸九間半不當六寸間  
七尺五寸是周代諸侯乃持城乃法量ありと知へ一吳  
越春秋不闔閭云く丈城郭を築を倉庫を立地不固く  
宜を制せん不豈天氣乃數以隣國を威以へる者あら  
むろ子胥云く有乃土を相一水を嘗て天不象里地不法  
里大城を造築一周圍に十七里陸門八以て天乃八風  
不象里水門八以て地乃八聰不法不と云里是城墉の  
地相を論する始か不登一周圍四十七里と今乃百七

五續一ノ七十九

十八町廿一間五尺四寸 周尺六尺不當 今の四里廿四町  
を歩と云 廿一間五尺四寸  
か但吳地志了吳羅城亞字形不作る周敬王六年丁亥  
造をたせり其城南北長十二里東西九里城中大何  
あり三横四直蘇州名標十望地號六雄八門皆水陸の郡  
郭三百餘巷不通と云敬王六年ハ吳王闔閭乃二年  
か也ハ亞字形城即子胥乃造築た大城か不へ 南北  
十二里東西九里ありハ周圍四十二里あり四十 然此亞字  
七里と云る合と云ハ小餘を除きハありへ 然此亞字  
形城と云ハ滕形乃曲尺と云京加賀守昌俊了異人乃  
傳魚た界城墉法をよハ道鬼ハ所謂陰陽乃城取乃本  
源か也ハ死後重復を厭と云其顛末を細論を先亞字  
乃物不識と云た不ハ高乃父乙乃鼎あり 西清古鑑 父乙

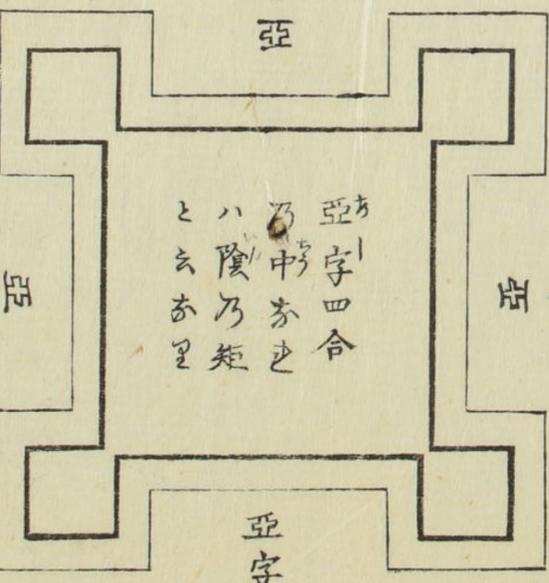
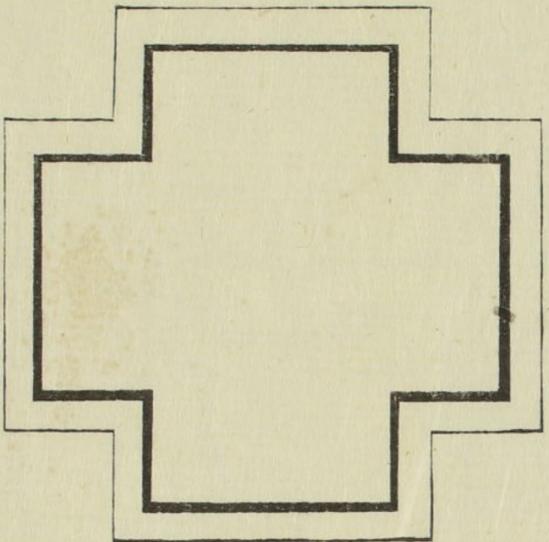


亞字形乃城之象也  
然其意之去也  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象  
借之於城之象

乃時代考人亦處  
辰より三千年前  
二千九百六十  
五年上あり  
黃帝始く城邑  
を築きしと云  
ふ此亞字形  
ありしなり  
一釋名小城上  
乃垣也也を  
睥睨と云言  
ふ孔中  
く非常を睥睨  
まふ形なり  
此睥睨小亦  
亞字形より  
象を

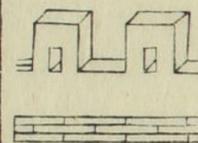
陽乃矩 道鬼所傳

陰乃矩 道鬼所傳



亞字全形あり

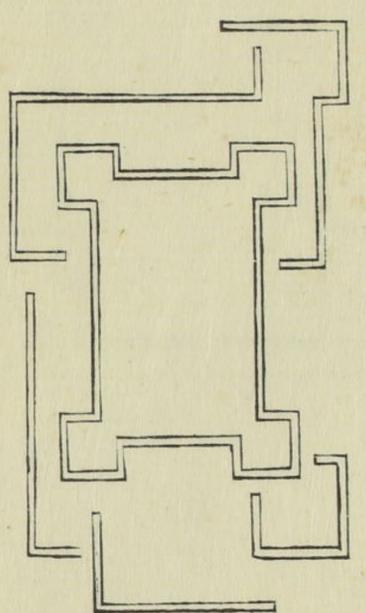
睥睨亞字形



取しと此之圖を通觀  
せば自然氷釋を爲し  
大に陰陽乃矩全く  
亞字形に依り  
道鬼の傳  
亞字四合  
ハ陰乃矩  
と云あり

乃遺法伍子胥乃秘訣亦時々西土了於之也河洛兩  
 圖と並称を盈き希觀乃寶典數千年乃後海傳乃外不  
 儼然と存を教と豈帝吉光片羽乃此乃之からんや

滕形矩 原加賀守昌俊所傳



印本武田三代軍記  
 及以甲陽軍鑑未書  
 等不此年乃圖を以  
 世前乃亞字形と令  
 世見之ハ中ハ金ハ  
 陰乃矩を分離せし  
 陽乃矩を分離せし  
 亦分へし

相傳人原加賀守昌俊の家より一人乃山伏來り一宿を  
 乞昌俊快く是を免以入伏喜く終夜武道を謀り且此

滕形乃城取を以授也昌俊受く我家乃馬印乃紋と分  
 以一本を黒地了白を滕一本を白地了黒を滕を畫し  
 と也昌俊是を晴幸傳へ晴幸乃馬場信房傳へ馬  
 場乃早川弥三左衛門幸豊傳へ幸豊乃小幡景憲傳  
 傳ふと云

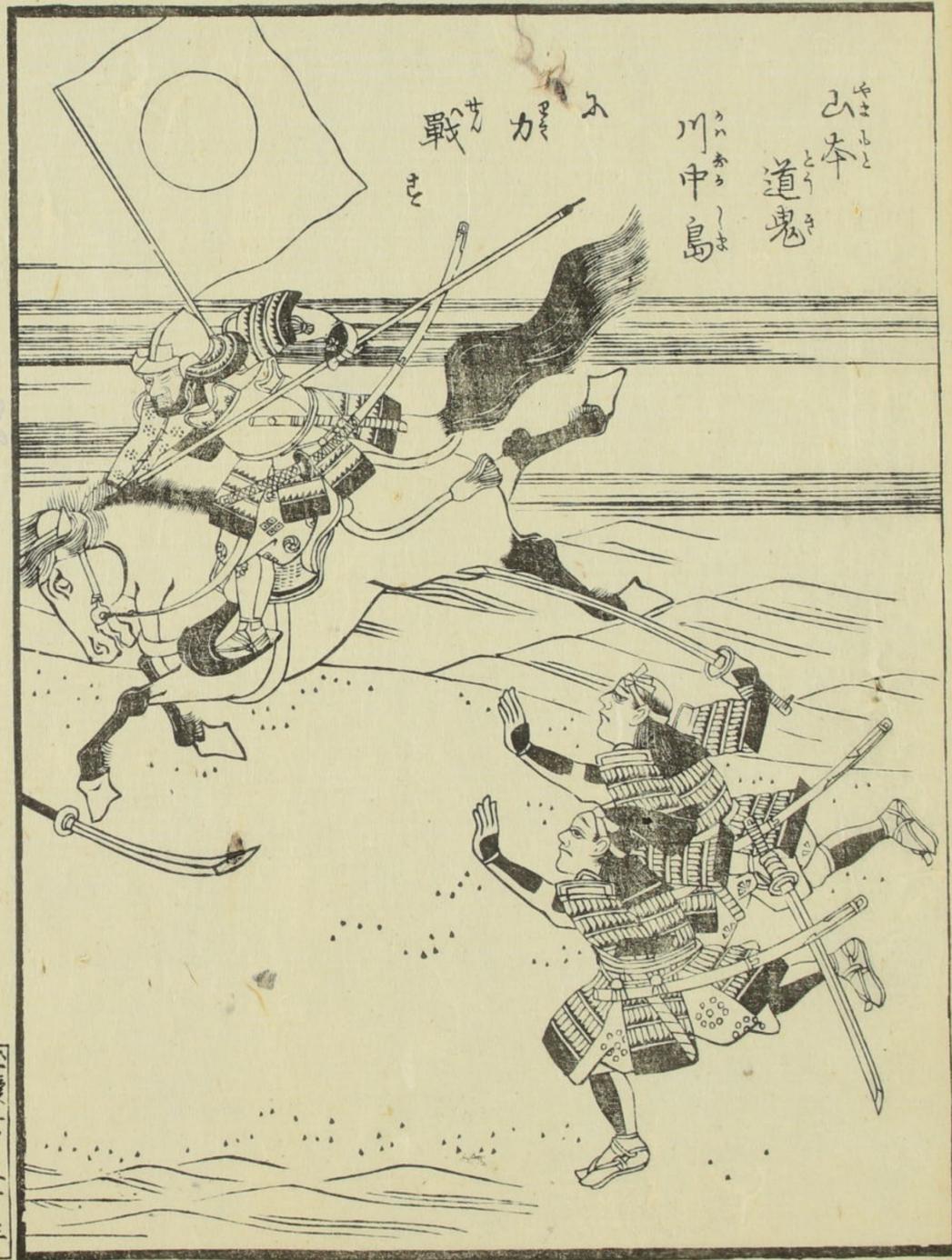
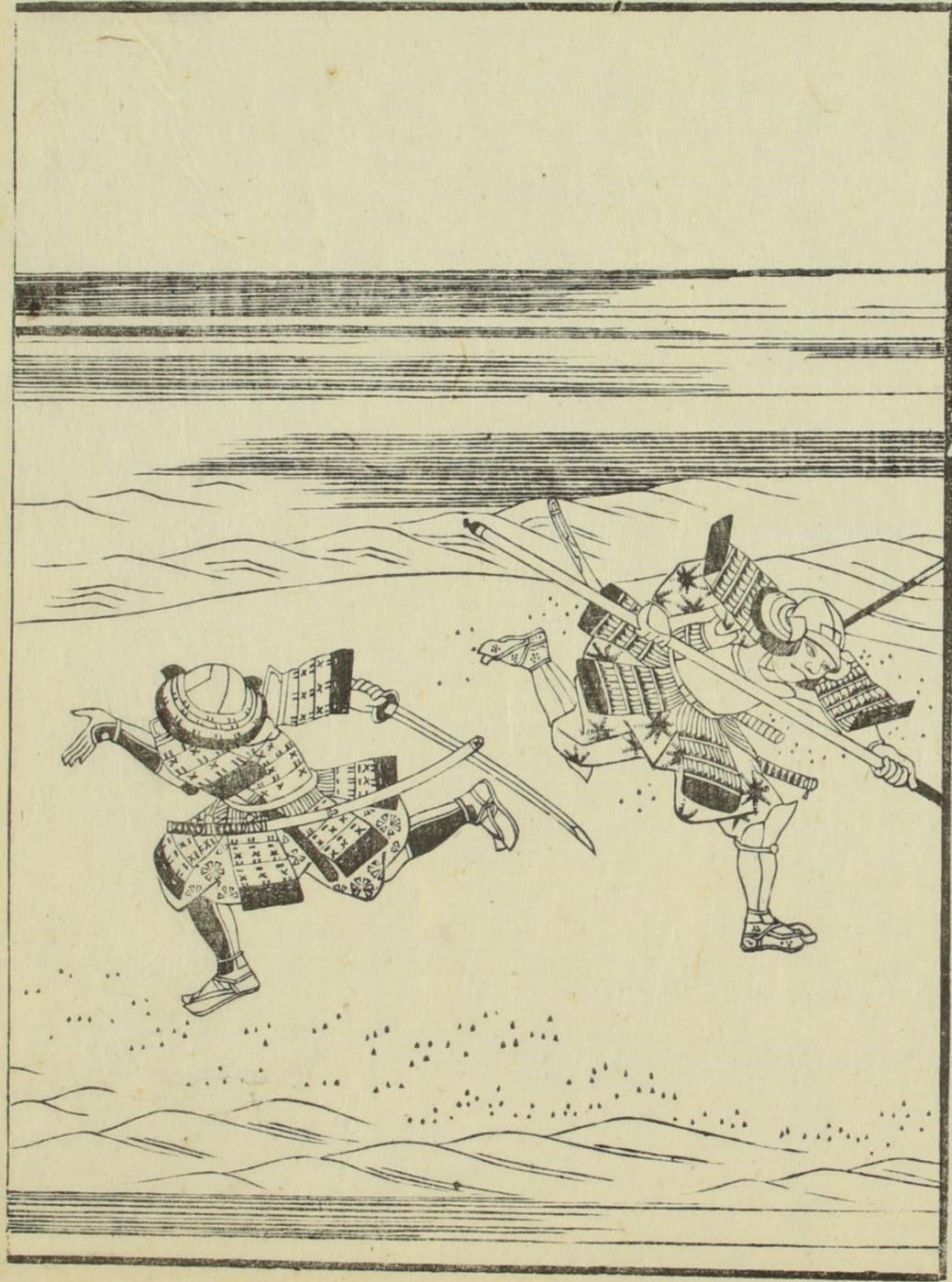
爰不道鬼り入置大を越後乃間諜走歸り申け分を政虎  
 既不上杉憲政乃養子と志く關東へ越へし北条氏康と  
 戦く是を斃し再度憲政を平井へ還さん之を謀ると云  
 と由氏康乃古河御所晴氏朝長を婿とかり龍馬頭義氏  
 朝長乃外祖父と云を以て八箇國乃大名其下風り立り  
 奔是を政虎是を羨りま川上洛志く征夷大將軍宰相

將義輝卿不養父憲政を止野國不還入關東管領乃奮  
規を連んを請中き不政虎中條神妙亦里とく中乃  
中つ了御教書をおせ也刺御名字を賜るは輝虎と改め  
彈正大弼了任ふ亦之邊衛關白前久公を關東乃公方と  
仰き奉里邊日國東へ越ふ亦里と北條氏康と合戦亦  
へそ世を落中亦告大里け色は道鬼熟思人様越後乃  
國乃春日山よ里相摸國不田原まも上野武藏乃兩國を  
隔る行程百里不及人然らむ村上義清を葛尾へ還入信  
濃國を争えんとも其暇亦亦應る以此間了兩科川中島  
を始め本曾小笠原伊素乃塙城を正しく為せら敷應ると  
まぐ了手遣亦里了かは信濃國まよ川平場亦亦里ぬ斯

分傳一ノ八十二

る處不輝虎よ里使者を來らせ甲越和睦乃王を中入表  
去はとよ道鬼云川亦言葉乃未終も亦不と諸隊將皆  
是を感歎了永祿元年又月十六日半島乃渡よ里仁八町  
大室乃方亦守千曲川を隔る信玄輝虎和睦乃面會有  
そ由定大里も信玄馬よ里下ら新とと遅るけるを輝虎  
深く憤里終了和議調も以水盛倍れ亦犀川を亦海川  
田ふ了陣を取信玄も高畑ふ了出張せら也七十餘日對  
陣亦里弦也共輝虎長沼村上乃御を放火了と越後へ  
引返しけ色ハ信玄も甲府へ歸陣せら敷終る亦同日年八  
月輝虎入道謙信永祿三年三月二日薙一萬三千餘人を  
引率し信列亦亦出植科郡西条ふ了陣城を搦へ海津





乃撤を眼下に見但一操了操落さんと攻城の支度を凝  
せは信玄二萬餘人を帥て猿馬場乃北茶磨山了并上里  
越後勢乃兵糧運送乃路を絶んと以道鬼より間謀を入  
る謙信乃陣城を窺せけり了士卒を運送乃路乃絶んと  
を愁く哀む了大将を小鼓を撃く甚樂ありと云道鬼即  
信玄了説く茶磨山乃陣を收め海津城了引移る時了飯  
富兵部少輔馬場民部少輔等西條山乃陣城了向く合戦  
を挑んてを逸り去る道鬼諸將を語ふやう謙信深く死  
地了入危きを見て怖色以必是多幸乃誓懐を一戦了晴  
さんと思ふ故あふへ大事乃軍あり味方急忽乃戦  
せは後悔臍を嚙とよ及せ去る子分を定むへとと二

萬餘人を二平小引分飯富馬場高坂甘利小山田小幡真  
田蘆田相本以下十人一萬二千人大正乃備を調へ西条  
山了押寄ふまゝ飯富昌景尤馬介信繁宛山内飯諸角原  
昌勝道遠軒太郎義信望月之助藤部今福浅利等十二人  
八千人旗本大奇乃備を定め川中島了押出たり  
太白陰短小飛龍虎翼鳥翔蛇盤四奇乃陣とかく天地  
風雲四正乃陣をか以とあり即是黄帝八陣か皇唐乃  
獨孤及八陣圖記八宮乃位正々色以則數億を以神威  
を故小其陣を八小を教を位を定む教所以あり衡外  
小抗く軸内了布風雲其四維了附了物を備ふあり所以  
か皇虎翼を張る以進之蛇敵了向く蟠まふ飛龍翔

鳥其勢上下去以用之致疑兵以其餘地固  
め遊車以之其後を接を致若く至くと列門具將發  
升去之後戰をむ弛張を家とを以て二廣失舉一持角  
を家とを以て四奇皆出と云宋史兵志不止るを管と云行  
を陣と云奇正を在るを出を言の營を正と陣を奇と  
あまに見え又蘇氏云司馬法五五人を伍と五伍を  
兩と云一萬二千五百人を二百五十軍と云以て五十人を  
三を取奇と云一 三十七百五十人を其餘七以て正と  
云以て八千七百五十人を以て四奇四正と云一八陣生以  
と云ハ西去乃書不奇正を説る大畧を里道鬼を太宗  
問對了天地風雲龍虎鳥蛇斯八陣何義と云李靖云く

傳人及者乃誤か古八人此法を秘藏を故不詭く八名  
を設く乃之八陣本一か里谷く八と云以て天地乃着ハ  
旗號不本の風雲ハ幡名了本の龍虎鳥蛇ハ隊伍  
乃別々本の後世詭く物象を設く何ハ了止らんや  
と云了後く五十人を一隊と云風幡を撃世天旗を  
云と云く十五隊是を龍乃陣と云七百五十 五十人を  
一隊と云風幡を撃世地旗を云と云く十五隊出色  
を虎陣と云七百五十 五十人を一隊と云風幡天旗  
龍陣と同く十五隊出色を鳥陣と云七百五十 五十  
人を一隊と云風幡を云と云く十五隊是を蛇陣と  
云七百五十 陣合をく三千人六十隊天地風雲乃品  
人於里



かま虚實を我ふあり奇正を敵りあり  
頃九月初十日乃と方色ハ朝霧深く立籠る前後左右子見  
え日この以夕刻過く漸と南の方を見りてせハ大根乃折りけ  
乃纏を押し立て其勢一萬二千餘人霧乃晴まらず寄来系信  
玄是を見ふ以おハ謙信ハ戦を心掛く寄ると知せたり備  
わ何そ見り冬色とく諸我入道を出立き諸我頼り立  
車懸り小備く程かく突掛り中へり騎と狂進ま  
道鬼備乃書小車掛りと云る我備を立切廻りて後廻  
里あり敵乃旗本と我旗本と打合むると積り掛り  
云かり但人數りよ里地形り依り見也  
道鬼即八千乃大奇乃備を立直し西條山へ向り以り一萬

二千乃正兵を呼返せ程中あり世以越後勢關を作り  
押寄面中振りて切掛る互に名を惜知かりたり中形色ハ  
一足中引か引くと脅りめり討り討り戦ハたり去共  
越後勢を思切り命を際り働けハ武田左馬助信繁諸角  
豊後守昌清等能戦ふり討死き道鬼出せを見り甲斐乃  
軍起り十五午戦を挑むと十餘度不及ふと云共一度  
中敵乃軍機を見損せしとかりし今曉霧乃霽りるが  
為り大軍迫りくと寄来里りをあらしは是れ我命を指し時か  
里と思定め鐘を握り越後勢乃中へ無二無三了突り入  
七騎り子負せ十二騎を突伏終り討死をせ遂りけ分り行  
年六十の歳 天保甲辰不更り二 子息其禄を襲たり一

天保甲辰不更り二  
百八十四年あり

天正二年五月廿一日冬何國設樂郡長篠小之討死せしとそ  
須法堀内書止武田信玄家臣須崎五平次堀内権之進  
云慶長廿年二月十三日正木村野小弘治二年丙辰  
助次郎非上軍人二二人乃未記あり  
三月政虎川中島へ出張晴信信玄と記さべし中軍  
小之出向對陣白々小抱見を追立草刈を追散し是輕  
世里合有之信玄行ふと戸神山乃中不信濃勢を思え  
世謙信陣所乃後へ廻し夜懸ふしと關乃聲を一度小  
上之切懸らば政虎を勝負より以筑摩川を越え引  
取へし其処を川中島より待懸く立拔く討止べしと相  
謀里保科彈正市川秋泉守以下十一頭其勢六千餘人  
戸神山乃谷際了付く推廻し信玄を一万八千小之備

を三先手乃合戦を始ふを待居ら敷謙信を廿五日乃  
夜了入信玄乃陣中小兵狼乃煙乃立を見し明朝軍あ  
るへき支度と察し其夜亥刻小物具志く八千乃兵を  
陣へ筑摩川を打越寅の刻不信玄乃本陣へ二文字了  
切く入思ひよりぬ折し先手乃合戦を待油乃乃所を  
也は周章大方から以板垣駿河守小笠原兼輝守一索六  
郎是輕大將小本勘助初鹿野原五郎諸角豊後守等討死  
まに見ゆる如何あらん板垣駿河守を天文十六年八  
月廿四日上田原合戦了討死せり弘治二年より三十年前  
分里初鹿野原五郎青沼助兵衛と共に永禄三年二月  
十六日小田原へ使し十九日小田原了入と家譜了見

之く連ハ五年乃後之く現存せ里此等乃事實相違せ  
志る依く考ふ是ハ三月廿六日曉乃合戦ト云く信難  
と云へ！此書當時乃人の自記と云とト暗識乃訛謬ト  
亦多し故に辨せしむるを得以

武云孫武史記云吳王闔閭乃將トあり時乃人かは天保甲辰ヨリ二千三百五  
十餘年前吳起楚乃悼王廿年不死也日本孝安天皇十  
不嘗る世を同く生せ以設令世を同く生せ教共人乃兵  
を借く以く己乃法を施す大不其力を展闔を確し勝  
戦を決す教之能を以武回氏と上校氏と孫吳の能を  
挾く趙魏乃形を擅し一時不肩を比躰を操き  
希世乃遇と云へ！と形里信免私不以為武回氏乃兵

を用也孫吳を宗とを不之ハ人皆去也を知里然也  
共孫吳を抛擲する孫吳乃城を出せ教處あるを知也  
蓋武回氏風く山本晴幸乃兵法了精妙を知是を其窮  
乏了賤し以く其能を達せしむ武回氏乃晴幸を以く  
軍を定め兵を練成を褒賞し觀る晴幸ハ武回氏を借  
く術を試み法を施す其相知乃意殆水魚乃相忘ら如し  
晴幸陣法を考定し隊伍を調練せ教多く唐宋乃兵法  
了治襲と云とト亦盡く是ハ不膠固と云と非也風土自  
然乃不從く取捨を於是皇朝相承乃兵法一變と云  
武回氏乃兵法と云乃去也武回氏乃兵法了あら以  
晴幸乃兵法と云晴幸乃兵法不非也唐宋諸家乃兵法

女里然志ノ上ノ技ノ氏ノ皇朝ノ乃古法ノ了依ノ潤餅ノ世里

先進補像玉石雜誌續篇卷第一終  
男信也技字并圖畫



